
明晰夢

レイル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

明晰夢

【Nコード】

N9241H

【作者名】

レイル

【あらすじ】

明晰夢とは夢の中を自由自在に動くことができ、場合によっては魔法や超能力なんかも使える夢を指す。

そんな明晰夢を見るのが好きな高校2年の女の子はそこである少女と出会う

「明晰夢」

私は寝るのが好き

あつと、これでは勘違いされちゃうか、確かに寝るのは好きだけど、好きなだけ寝るのが好きというわけではない

私はただ寝るのが好きなんじゃなくて夢を見るのが好きなんだが夢というのも無闇に寝れば見れるというものでもなく、安定した日常生活を送ってないと長時間夢を見られない

だから私は授業中も寝ることはないし家でも食っちゃ寝食っちゃ寝の生活をしているわけじゃない

そこでなぜ夢が好きなのか、そこを疑問に思う人もいるだろう

理由は単純だ、夢の中を自由自在にする事ができるからだ

別にこれは魔法や超能力の類ではなく普通の人間でできることだ、練習や訓練は必要だけでも

具体的に夢というのは起きたときには2割覚えていればいいほう、あるいは忘れていることがほとんどだ

でも私は夢日記をつけたり日常での自分の癖を夢の中でやったりすることで夢をはっきりと捉えてしっかり記憶することが出来るようになった

普通なら夢を見るだけではそれを夢と自覚している事もほとんどなく、ただなんとなく自分の性格に合わせた動きをしてしまうのが普通の夢だ

けどこんな言葉がある

「明晰夢」

これは夢を夢と知覚してその夢の中を自由に動ける夢を指す

くわしく調べたわけではないので曖昧な知識だが簡単に言えばこう

なる

実際に人間が見る夢は大概が無意識のうちに現実と思いこんでいて、そのなかでは現実にあった行動をする

でも私はその夢をしっかりと夢として認識できるように練習したそのおかげで何ができるようになったか、そこが私が夢を好きな所だ何ができるかというのだ、いわゆる魔法や超能力を夢の中で体感することができる

しかもそれが夢ではなく現実とも思える感触だからもうやみつきである

明晰夢を見る事ができようになってしばらくのうちはアニメや小説でよくある攻撃系の魔法を使って夢を楽しむ事が多かった
だが今ではそんな事よりもはまっている事があるのだ

夜10時、私は最近ハマっているネットゲームをやっていた

私はネットゲ仲間と狩りをしながら雑談するのが好きだった、ネットゲを始めた当初こそまったり狩りを楽しむ人には出会えなかったがそのゲームのSNS等で次第に雑談仲間を増やしつつ、さほど強くないモンスターを仲間数人で狩りつつ雑談を楽しむ、そんな感じでゲームをやっていた。

10時半になったところで私はその雑談仲間に寝落ちを伝えて歯を磨き、布団に潜り込む

高校2年生にしてはやや速い就寝だったし、ネットゲ仲間からも寝るのが早いので小学生なのかと疑われる事がよくある。

しかし私が優先するのはネットゲより明晰夢、といっても毎日確実に見えるわけではないが現実で魔法を使っているようリアルな感覚は捨てがたい。

でも今はそれよりもハマっている事があるのだ

「昨日はフォートワインにバーゲンダッシュ・・・今日は何食べようか」

そんな事を呟きながら布団に入ると、すぐに眠気が襲ってくる。

習慣とはやはり慣れる物だなあと思いながら私は夢の世界へ旅立っていった。

目を開くと広い草原とその真ん中に一本の木があるのが見えた。私は自分の手を開き手の平に「ゆめ」という字を指でなぞる。

これは夢を夢と知覚できるようにするためにわざと身につけた癖だ。その途端、ぼやけているように感じられた視界がはっきりとして、自分が地面に立っている事を実感し、

風の匂いが鼻孔をくすぐるのと同時に草原に生える草が出す涼しそうな音が耳に届く。

風は春風のように花の甘い香りがしてほんのり暖かい感触が肌を撫でた。

「んゝきもちいい風だゝ青空というわけでもなく、でっかい入道雲がひとつ浮かんで、空の様子は夏なのに肌で感じる風は春かゝ」どこか夢のような光景だが実際にこれは夢だと自分にツツコミを入れながら、私は景色の中に浮かんでいる一本の木を眺め、そちらに向かう。

「やっぱり歩くよりもこっちのが気持ちいいゝ」
と言いながら私は空に飛び上がり、滑空するように大きな弧を描きながらその木に向かう。

明晰夢、それは自分で想像できる限り、その事を反映させる事ができる。

私は文字通り空に向かってジャンプすると、20メートルくらいの高さまで飛び上がり、背中から翼を広げ、空を飛ぶイメージを思い描いた。

思い描くだけでその思い描いた通りになる。

本当は自分が空に浮かんでるだけをイメージしても、空に浮いて飛ぶことができるのだが、見た目優先ということで翼をイメージしている。

まあそんな事はさておき、私は弧を描いて木の周りを飛びながら辺

りを見回す。

見えるのは延々と続く芝生と地平線、あとは真下にある一本の木だけだ。

私はなんとなく寂しさを感じながら、その一本の木に降りていく。

「これは林檎の木かな？」

木の葉の間だから木の枝にとまった私は目の前にある赤い美味しそうな実を見て言葉を出した

ひとつを手にとってかじってみる

「んゝ確かに林檎の味だし美味しいんだけどあまり甘くないなあ」ともう一口かじってからこの林檎にかける魔法を考える

「甘くするだけじゃなくて水分ももうちょい多めにして・・・よし、とりあえずこれでやってみるか」

どうするか決めたとこで彼女は林檎を両手に乗せて額を林檎に当てる

「エラワキジャ」

と呟く、すると林檎がほんのりと白く発光しはじめる

5秒ほどたってその光が収まってから彼女はその林檎をかじった

「んゝうまういった！こないだのパイナップルみたいに実の触感がおかしくならないでよかった♪」

と喜びながらその林檎を囓る

私が明晰夢を見る理由は果物や食事を、カロリーを意識せずに無限に食べられるからという、なんとも女性的意見の強い理由である。

しかしそれに付け加えて味も食感も、自分で自由に変更する事が可能なのだからもう夢中というわけだ。

それとさっき呟いた呪文「エラワキジャ」は、「味変われ」をローマ字にして逆から読んだだけ。

なんか呪文っぽいのが欲しかったから思いつきでやってみたんだが、その呪文が呪文っぽくないと感じるのは気のせいだ。

気にしたら負けですよ。

誰に説明するわけでもなくそんな事を考えていると

「ミ」

そんな鳴き声が耳に入り、続いて左手に何か小動物的なのが擦り寄ってくるのを感じた。

見るとその動物は黒い子猫だった。

飼い主の手入れがマメなのか、毛並みがとても良い黒子猫で、くりっとした金色の目が印象的。

「か・・・かわいい・・・」

そう呟いて黒猫に手を伸ばしてみる

振れた直後猫は一瞬びくっと体を震わせだが、すぐに落ちついたのか左手に、甘えるようにすりすりしてくる。

「はーウチでもこんな猫飼いたいな」

と呟き、母が猫OK犬OUT、父が猫OUT犬OKとどっちも飼えない我が家はなんとかならんのかと思考する。

ちなみに中間としてインコを提案したが両方に却下された。自分でもどの変が中間なのかわからなかったが。

そんな事を考えつつ、相変わらずリング齧りながら空いてる左手で子猫とじゃれていると、凜として透き通った声がかけられた。

「その子が気に入りましたか？」

驚いて後ろを振り返ってみると、そこには金色の髪の毛に整った顔立ち、綺麗な青い瞳をした自分と同年代と思われる少女がいた。

「・・・・・・」

そして女の自分からでも美人と思える綺麗な少女だった

「あの、失礼ですが口が開いていますよ？」

そこで我に返る

「はっ！あまりの美人について呆けた！」

我を取り戻しきれてないまま変な言葉を出してしまう。

「そんな美人だなんて、褒めても何も出ませんよ？」

と微笑みながら言う少女に私は思わず狼狽える

その理由は別に話しかけたからではない、夢といえども出会う人とは自由に会話ができるし、場合によっては友人が夢に出てくる事

もあった

ただこの場合は、その話しかけてきた少女がかなりの美人ということで、狼狽えてしまったというだけだ。

「その子、気に入りました？」

そう言っただけの手にくっついていて黒猫を指さす

「ええ、毛並みが良くて綺麗な金色の瞳が私の心をつかんで離れてくれません、しかも黒猫ですよ、ここはポイント高いです」

実は黒が好きな色だったりする、カラス族ではないが

「黒猫が好きなんですか？」

「んー確かに黒は好きだけど、なんかこの子ってなんだがかっこよくてかわいい感じがしません？」

かっこよくてかわいい・・・自分で言っただけ意味不明だがそう思うのだから仕方がない

これがよく言うかっこいいというヤツなんだろうか。

「この子をそんな風に言っただけで貰えた初めてですね、自分の事じゃないのに嬉しいです」

少女はそう言い微笑みながらその猫に手を伸ばす

黒猫はその少女の手に甘えて少女にしがみついたが、その目は私の持っている林檎を見ている

「この木って林檎の木だったんですね」

猫の視線の先に気づいたその少女が、おいしいですか？と聞いてくる。

今更だがその少女はどっかのお嬢様みたいな雰囲気纏っていて、一般的に考えるとなんだかフレンドリーに対応しにくい気がした。

「んーそんなに甘くないけど味変えればおいしくなるよ、食べてみる？」

とか思いながらも普通に言葉出してる自分は一般的思考をしていないのかもしれない。

「味を変えるですか？そんな事できるの？」

と心底不思議そうに聞いてくる

「うん、まずこれ食べてみて」

と言って側に置いてあったまだ味を変えていない林檎を手渡す

「確かにあまり甘くないですね、では味を変えるとはどうやって？」

「こうやって魔法かけるの」

そうしてその林檎を両手に持ち、林檎の甘みを想像しながら呟く

「エラワキジャ」

林檎が薄く発光するのを見るとその少女は驚いて目を見開く

発光が収まったその林檎をその少女に手渡すと林檎を齧る

ちなみに唱えた呪文の『エワラキジャ』だが、これは単純に、『味
変われ』をローマ字にして逆から読んだだけだったり

かっこ悪い呪文なのでなんとかしたいとは思う物の、結局これで定
着してしまっている

「甘いし水分も増えてる・・・しかも調味料で味付けしたんじゃない
くて元々の味だったみたいになんな味ですね」

そんな感想を呟いた少女ははっとしたような表情になり、顔を私に
向けて聞いてきた。

「もしかしてあなたも明晰夢を見ていますか？」

その言葉に私は驚いた、夢の中で明晰夢についての話をした事はあ
っても、

夢の中の人たちにとっては、そのときの状態が起床した状態だった
ようで、夢を見ているわけではなかったからだし

その人たちは私のように魔法を使うことはできなかった

それに私が最も驚いたのは「あなたは」でなく「あなたも」という
所にある

「ってことは・・・あなたも？」

驚きはたぶん表情に出てるだろうが、私はそう聞いてみた

「はい、私もよく明晰夢を見るのですが、こんな風に夢の中で他の
人と会うのは初めてですね」

と彼女はそう言い、なにか考えるような表情になりつつ林檎を齧る。
私はそこで気になったことを少女に聞いてみる

「・・・とりあえず聞いて言い？その格好は現実世界でもその格好？それとも魔法で作ったの？」

実は明晰夢で使う魔法に制限はなく、文字通りなんでもできるのだ、背中に翼を生やして飛ぶこともできるが

翼を生やさなくても飛ぶことができるし自分から動かなくても遠くの建物を強引に自分の近くに移動させる事も出来る

私は明晰夢を見ている中で今は本来の格好だが、これも自由に変える事が可能であり、それと同様にこの人が顔などを変えている可能性もないわけではない

といっても姿を変えて鏡を見ないと変えた自分の顔はわからないわけだし、延々と自分の作り物の顔を見続ける程無駄と思える物はない、

現実ではその顔になれないのだからなお更であった。

「いいえ、この顔は明晰夢でも現実でも同じ顔ですよ？」

「こんな美人が世の中にはいるのか・・・」

少女の言葉に思わず口に出してしまう

少女のあなたは？という答えに私も現実と同じ格好に同じ顔だと答える

「ところでお住まいはどこですか？見間違いでなければ日本かなと思っただんですが」

「ええ日本よ、東京の八王子市に住んでるわ」

と答えると少女は微笑んで

「私も日本の八王子市に住んでるんですよ、といっても今日引っ越したばかりですけどね」

「もしかしたら会うこともできそうだね」と少女の言葉に応える

しかし明晰夢で現実にいる他人と遭遇する事なんてあるのだろうかという疑問が頭をよぎるが

例えそうでなかったとしても何の不都合もないし、むしろそっちの方が楽しそうだと感じる。

「引っ越してきたって言うけど、前はどこ住んでたの？」

「イギリスに住んでたんですけど、親が日本に会社を建てたので、その都合で一緒に引っ越してきたんです」

イギリスとは・・・しかもこの微妙な時期にですか

「それにしても日本語上手だね」

「実は私ハーフで、母が日本人なんです。それでよく日本には遊びに来ていて、そのおかげですね。」

どの変に日本人の血が入っているのか疑問な程に日本人離れた容姿だよ・・・

とか考えてみるがそれなら日本語が流暢なのも頷ける。

別に疑っているわけではないが

でももし会えるなら実際に現実で会ってみたいと思えてきたので、もちかけてみることにした。

「いつ会えるとかわからない？」

「引っ越したばかりで家の整理とか学校の転校の手続きなど色々用事が多いので・・・今はなんともいえないですね」

と、残念そうに無理だと言う。

話した感じ嘘をつく人ではないみたいなのでおそらく文字通り忙しいのだろう

まあ引っ越したばかりならそんな事もあるだろうと思っていたら

「そろそろ時間・・・ですね」

「あゝもうそんな時間かあゝ」

明晰夢は当然ながら夢なのでいつまでも見続ける事はできないいつも意識が薄れていって気がついたら目が覚めて朝になっているまあいきなり目の前が朝日に照らされた壁や天井でも困るわけだがそんなわけで次第に眠気のようなのが体を巡るのを感じてきた

「とりあえず会ったときのお互いの確認の言葉でも作っておきます？」

徐々に薄れ始める意識を感じながらそう提案する

「そうですね、あまり変だともし間違えたときに変な目で見られま

すしね」

「そうねえ・・・じゃあこういうのはどう？」

私は思いついた事を彼女に提案してみた、とっさの思いつきにしては結構いい考えだと我ながら思う。

「それはいいですね、実際に知らなかったら教えればいいだけですし」

「それじゃ、もし会えたらその方法で」

「ええ、またいつかお会いしましょう」

私は眠気に似たような感覚で、薄れていく意識の中微笑みながら別れの挨拶を交わした

その数日後、私が学校に行くと教室の机がひとつ増えていて

S H Rで転校生を紹介された

転校生は金色の髪の毛に整った顔立ち、綺麗な青い瞳をしていた

私が驚き、彼女を見つめると、彼女も驚いた表情でこちらに視線を向けてくる。

そして彼女と目があった途端、お互いに驚きを仕舞い、軽く微笑むその微笑みを見た馬鹿共（男中心に数人の女子）がざわめく

そしてその転校生はその微笑みをクラスに向けて自己紹介を始めた私はその自己紹介を聞きながら、楽しみが増えそうな強い予感を感じて

新しいクラスメイトを眺めていた

（後書き）

やや長くなってしまいましたが高んとかまとめられました

今回は構想10分の制作2時間強ですかね

予想よりちよつと長引きました

ほのぼのになってくれてなにより

実はこの二人オンラインゲームの狩り仲間だったり

ネトゲの下りはそのあたりの伏線だったり

少女に激辛にした林檎食わせる予定だったり

でも長くするとまとまりなくなりそうだったので省きました

こんな小説でも感想くれてやるよ！

ってツンデレな方は感想くれると嬉しいです

ちなみに明晰夢は（めいせきむ）と読めます

あとがき追記（2010年1月）

ストーリーそのままに文章を修正しました

状況表現とか会話の言葉とか誤字とか

明晰夢では実際現実にいる他人と会うことはできませんが

そんな事ができたらいいなと思って作ってみたのがこの小説です。

修正したおかげで前よりかは読みやすくなった・・・ハズ

読んでくれてありがとうございます。

さらにあとがき追記（2010年4月）

せっかく登場人物の名前がないのに猫にだけ名前があるので
名前省きました

あと呪文の解説っぽいものも追加

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9241h/>

明晰夢

2010年10月9日21時24分発行